

Title	英國の重農主義者(下)
Author(s)	堀, 經夫
Citation	經濟論叢 (1931), 33(5): 668-681
Issue Date	1931-11-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130105
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第三十三卷 第五號

昭和六年十一月一日發行

（禁 轉 載）

論 叢

景氣徵候論について……………文學博士 高田 保馬

魚食論……………法學博士 財部 靜治

時 論

英國の重農主義者……………經濟學博士 堀 經 夫

研 究

赤字財政と對策……………法學博士 神 戶 正 雄
平價切下論を駁す……………經濟學博士 汐 見 三 郎

說 苑

カツセル教授の貨幣數量説の實の吟味……………經濟學士 柴 田 敬
獨逸大銀行と中小工業金融……………經濟學士 楠 見 一 正
金數量説に就いて……………經濟學士 松 岡 孝 兒

附 錄

ケインズの基本的均衡關係……………經濟學士 中 谷 實
世帯統計に就て……………經濟學士 岡 崎 文 規
貸借對照表の基礎的考察……………經濟學士 熊 本 吉 郎
老齡船の處分に就いて……………經濟學士 佐 波 宣 平

新着外國經濟雜誌主要論題

英國の重農主義者 (下)

堀 經 夫

第二節 井リヤム・スベンス

井リヤム・スベンス (William Spence, 1783—1860) の主要なる論著は左の三篇である。

- (1) The Radical Cause of the Present Distresses of the West-India Planters Pointed Out; and the inefficiency of the measures which have been hitherto proposed for relieving them, demonstrated: with remarks on the publications of Sir William Young, Bart. Charles Bosanquet, Esq. and Joseph Lowe, Esq.: relative to the value of the West-India Trade, 1807.
- (2) Britain Independent of Commerce; or, proofs, deduced from an investigation into the true causes of the wealth of nations, that our riches, prosperity, and power, are derived from sources inherent in ourselves, and would not be affected, even though our commerce were annihilated, 1807; 6th ed., corrected and enlarged, 1808.
- (3) Agriculture the Source of the Wealth of Britain; a reply to the objections urged by Mr. Mill, the Edinburgh Reviewers, and others, against the doctrines of the pamphlet, entitled "Britain Independent of

Commerce." With remarks on the criticism of the Monthly Reviewers upon that work, 1808.

右の書名によつて想像される如く、スペンスの第二の著書『商業に依存せざる英國』に對して、ジェイムズ・ミルが反駁を加へ——『商業辯護論』(註一)によつて——、スペンスはこれに答へるために第三の著書『農業富源論』を書いたのである。尙ほかのキリヤム・コベト¹⁾は、商業撲滅論を持論としてゐたが、スペンスの第二の著書出づるや、彼が刊行しつゝあつた雑誌 The Weekly Political Register (1803—1835) の一八〇七年十一月より十二月にかけての數號に亘つて、『商業を滅ぼせ』²⁾なる題下に、スペンスの主張に對する賛成論及び『商業に依存せざる英國』よりの多くの拔萃句を掲載した(註二)。是れミルが『商業辯護論』の中でスペンスの外にコベトをも批判した所である。

(註一) Mill, James, Commerce Defended. An answer to the arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and others, have attempted to prove that commerce is not a source of national wealth, 1808. なほ本書の最初の刊行を一八〇七年なりとする説があるけれども(例へば、アレクザンダー・ペイン著『ジェイムズ・ミル傳』一八八二年、六二頁。パレグレイヴ『經濟辭典』第二卷、七五五頁)、私は二三の理由(こゝでは之を省略する)によつて一八〇八年説を採る。

(註二) Cf. Selections from Cobbett's Political Works: being a completed abridgment of the 100 volumes which comprise the writings of "Porcupine" and the "Weekly Political Register." With notes, historical and explanatory. By John M. Cobbett and James P. Cobbett. 5 vols., 1835. vol. ii., pp. 343-396.

以上の諸著書就中『商業に依存せざる英國』に現はれたスペンスの學說について注意すべきは、

1) William Cobbett (1762-1835).
2) "Perish Commerce."

次の三點である。第一は富の根源に關する重農主義的見解であり、第二は製造業論であり、第三は商業論である。而してこれ等の議論の中に於て、彼は同時に佛蘭西の重農學說に對して或る程度の修正を加へて居ることを忘れてはならない。

第一 富の根源 『商業に依存せざる英國』は、其の題名の示す如く、英國の大は商業（外國貿易の意の旺盛なることに依るものである、との通俗の見解を打破し、苟くも愛國心を有する限り、個人的には商業の隆盛といふことに大なる利益關係を有つて居る商人や製造業者と雖も、商業は何等の富をも齎らすものでなく、ただ奢侈品——『それは吾々に無くても濟むものであり、又それを獲るために吾々は遙かにより、貴重なる必要品を與へなければならぬものである、』³⁾——の獲得を可能ならしめるにすぎない、といふことを知るに至るならば、今日まで『商業の價值が買取られてゐた』⁴⁾ことに氣附くであらう、との主張を明かにするために、書かれたものである。

かくてスペンスは、重農主義的見解を斥け重農主義的見解を探らんとして、先づ富といふことと繁榮といふことと(Wealth and prosperity)の意味及び其の區別を明かにして置かなければならない、となした。即ち彼によれば、

『富は、資本、開墾された生産的土地、及び人が通常價值ありと認める物、これ等の物の分量より成る、と定義さるべきである。』⁵⁾

3) Britain Independent of Commerce. 6th ed., 1808, p. 10.

4) *Ibid.*

5) *Ibid.*, p. 11.

『富に於て、着々と増進しつゝあり、人口に對する妨げが殆どなく、而して其の住民の總ての階級に對して職業と生活資料とが容易に見出されるやうな國民は、繁榮して居る、といはれ得るであらう。』⁶⁾

これに由つて觀れば、富又は富んで居るといふことは、(イ)金や銀を豊富に有つて居ることを意味しない——『スペインは金や銀を澤山有つて居るが、富を有つてゐない』——と共に、(ロ)繁榮又は繁榮して居るといふ概念(これは動態的概念である)と異つて、靜態的概念である——例へば米國は大いに繁榮して居るが未だ富んでゐない、——といふのである。

そこでスペンスにあつては問題が二つに岐れて來るのであつて、其の一は富の根源に關する問題であり、其の二は富と繁榮とを區別することの效用は何處にあるかの問題である。前者に對する彼れの解答は佛蘭西重農主義の根本思想への賛成論となり、後者に對するそれは重要主義學說の適用に關する修正論となる。

本項に於ては第一の點を考へるわけであるが、スペンスは富の根源に關して二大學說ありとなし、一方を商業派(the mercantile sect)と呼び、他方を農業派(the agricultural sect)と呼んだ。

彼はこれ等兩派の主張を約説したる後に、これを比較論評して曰く、

『商業派と農業派との異なる意見は上述の如くであるが、兩方の側に幾らかづゝの眞理と誤謬とが含まれて居るやうである。而も佛蘭西の經濟學者(農業派——堀註)の體系の根柢となれる事實を注意深く觀察するなら

6) *Ibid.*, p. 12.

7) *Ibid.*, p. 11.

8) Cf. *ibid.*, p. 12.

9) Cf. *ibid.*, pp. 13-16.

ば、……彼等が總ての富は農業より來るとなしたるは正しいやうに見える。¹⁰⁾』

然らば何故然うであるかといふに、今英國の如く土地所有者階級と農業者階級と製造業者階級とが存在する社會を想像するならば、製造業者階級が得る所の生活資料は、殆ど總て『地代といふ名前で土地所有者階級に支拂はれる剩餘生産物』¹¹⁾から引出されなければならないのであるからである。尤も製造業者の親方が利潤を蓄積して富を獲得する場合があるけれども、併し彼が得る所の利潤は流、通、行、程に於て發生するのである——例へば、彼が小麥五十クヲオタア分の費用で造り得た馬車を、小麥六十クヲオタアと引換へに土地所有者に賣り得た場合の如し、¹²⁾——から、この利潤又はそれを蓄積して得たる富は、決して創造されたものではなくて、土地所有者より移轉されたものにすぎない。

かくて、『社會の最も野蠻な狀態に於ても又最も文明な狀態に於ても、『農業は國富の大根源であり、製造業は一種類の富を他種類の富に變形することにすぎない、』といふ、『佛蘭西の經濟學者の大公理 (the grand axiom) は、疑もなく眞理の上に立つて居る。』¹³⁾

以上の如く論じて、スペンスは、剩餘生産物即ち富なりとなし、従つてこれを生み出し得る農業のみを以て富の唯一の根源なりとしたのであるが、併し彼は、この大公理を實際に適用するに當つては、少くとも歐洲諸國殊に英國に關する限りに於ては、重農主義者の主張に二三の修正

10) *Ibid.*, pp. 16-17.

11) *Ibid.*, p. 17.

12) *Cf. ibid.*, pp. 18-19.

13) *Ibid.*, p. 22.

を加へなければならぬ、と論じた。而してこの修正論の一つに關聯して、吾々は、スペンスが富と繁榮とを區別せしことの效用は何處にあつたか、といふ前記の第二の問題を考察しなければならぬ。併し彼れの修正論全體は、要するに製造業者階級に關する佛蘭西の重農主義者の政策論に加へられたものであるから、右の問題は、製造業についての彼れの見解を取扱ふべき次項の中で、之を明かにするであらう。

第二 製造業論

スペンスは重農主義的政策論の誤謬を大體三つ擧げて居る。其の一は、重農

主義者が製造業は農業を進歩せしめる上に必要な原動力であるといふ事實を無視して居ることである。¹⁾ 其の二は、彼等が、『現在奢侈品の製造に従事して居る人々の大部分が土地の耕作者となるならば、それは一國にとつて遙かに有利であらう』とか、『或る國に未耕の土地が一エイカアでもある間は、其の住民は如何なる製造業に従事するよりも、その土地の耕作に従事するのが最も良いことであらう』²⁾とか、主張して居ることである。其の三は、彼等が富と繁榮との區別をなさざりしことである。³⁾

而してこれ等の誤謬は、少くとも歐洲の諸文明國殊に英國に於て、如何にして地主階級、農業者階級、及び製造業者階級の別が起り、其の爲めに農業そのものが如何に進歩したか、の歴史的事實を知らざることに起因するのである、とスペンスはいふ。今彼れの言葉の一部分を引用する

1) Cf. *ibid.*, pp. 25-26.
2) *Ibid.*, pp. 26-27.
3) Cf. *ibid.*, p. 29.

であらう。

『新種の必要品又は奢侈品の製造業者』が英國に渡來するや、『領主及び土地所有者は、彼等が元と多くの從屬者の支持のために支出する慣はしになつてゐた所の剩餘收入を、彼等の個人的満足のために、便利品又は裝飾品の購買に向けるといふ、彼等に與へられた機會を、熱心に利用し始めた。』其の爲めには、『彼等の剩餘收入が出来るだけ大であり、且つそれが貨幣で支拂はれることが、必要となつた。』是れ借地制度と貨幣地代制度とが出現するに至つた理由である。而して借地人たる農業者は、彼等の生産物に對する新市場を製造業者階級の中に見出したから、『出来る限り多くの土地を耕作し、且つ耕作地を出来る限り生産的ならしめんと欲するに至つた。』かくて、『製造業者階級の人口増加はより、多くの土地の耕作を促し、其のために職業が農業者階級の増加人口に對して備へられ、従つてこの階級は土地所有者により、大なる地代を與へることが出来るやうになり、更に土地所有者は再び製造業者階級に對して職業を備へる力をより、多く有つ、』といふ風に、これ等三階級は互に依り合ひつゝ國富の増進に直接間接に貢獻するのである。⁴⁾それ故に、『總ての富は農業によつて齎らされる、といふ佛蘭西經濟學者の大公理』の正當なることは否定出来ないが、彼等流にこの大公理を適用することは誤つて居る。『農業と製造業とは國富を創造する機械の二つの主要車輪であり、而も(少くとも歐洲諸國の如き經濟組織を有つた國家に於ては)後者こそ前者に動力を與へるのである。⁵⁾』

之を約言すれば、スペンスは、古くよりの文明國に於ては、其の富の眞の根源は飽くまで農業であるけれども、この國富を増進せしめるに役立ちたる間接的手段、即ち製造業の發達を、輕蔑してはならない、——重農主義的政策論の第一及び第二の誤謬は茲に明かであらう、——と主張

4) 以上 cf. *ibid.*, pp. 24-25.

5) *ibid.*, p. 31.

するのである。而して古くよりの文明國とは、即ち既に富を蓄積したる國の謂ひであるが、然らばこれより富の獲得に向つて努力しようとして居る國（例へば米國の如き新國）、換言すれば繁榮に向はんとしつつある國に於ては、如何なる政策が採らるべきであるかといふに、スペンスは、その場合にこそ、『社會各員の注意を農業に向けしむる所の、佛蘭西經濟學者が推奨措かざるその制度が、繁榮に達する最も有效なる方法である。』といふのである。茲にスペンスが富と繁榮とを區別せし理由、並びにこの區別をなさざりしことを重農主義者の第三の誤謬なりとなす理由が、明かであらう。

併し乍ら、惟ふに、スペンスの右の如き議論は、理論として不徹底を免れないやうである。何故なれば、既に富を獲得したる歐洲の古い國と雖も、曾ては新しい國であつたのであるが、既にその當時に於て農業の進歩即ち國富の増進に對して製造業の勃興隆盛が大なる刺戟となつた——とスペンスは認めるのであるが——とするならば、米國の如き新しい國に於ても正に同じことが考へ得られる筈であり、従つて彼れの謂はゆる『繁榮に向はんとしつつある新國』にこそ重農主義的政策論が適用されて然るべきであるといふ議論は成立し得ないからである。

第三 商業論 スペンスは『歐洲の社會と同様の構造を有つて居る各社會の成員』を、次の四階級に分けた。即ち、(一)土地所有者、(二)耕作者、(三)『彼等の實際の勞働によつて粗生生産物を製造

品に變化せしめる人々のみ』を意味する所の製造業者、及び(四)不生産的階級の四者である。この最後の不生産的階級は、アダム・スミスの言葉を引用すれば、『其の勤勞が爲された瞬間に消滅し、其の存在の跡を觸知し得べき形で全く残さない』所の、それ等の人々を總て含み、其の中には商人も數へられるのである。¹⁾

スペンスはこれ等四階級間の關係を述べて曰く、

『一國の全收入(剩餘生産物)は其の土地から(農業者階級によつて)獲られ、而してこの收入の受領者は土地所有者階級なのであるから、残りの二階級即ち製造業者階級と不生産的階級との收入は、この土地所有者階級から引出されなければならないことが、明白である。農業によつて齎らされる富が生産されるのは、これ等最後の二階級の需要の結果ではあるけれども、これ等の階級は自身で收入を創造し得ず、従つて彼等の消費物を購入するための收入を他から得なければ消費をなし得ないのであるから、彼等の收入、即ち土地生産物を購入する手段が、其の唯一の源たる土地所有者階級から得らるべきは、論を俟たざる所である。それ故に、歐洲の社會と同様の構造を有する各社會に於ては、土地所有者階級が土地より取得する收入の大部分を支出することが、國富の創造にとつて不可缺なる一條件なのである。彼等は社會の收入の通過門であつて、富と繁榮とが社會に殖えるためには、彼等が其の收入を費消することが絶対に必要なのである。彼等がこの義務を遂行して居る間は、萬事がうまく運行する。⁴⁾』

この説明はケネーの經濟表の解説とやや似て居るが、併し(イ)土地所有者階級の收入費消の義務を強調し、(ロ)不生産的階級(ケネーのいふ)が其の派生的收入——土地所有者階級の原始的收入に

1) Cf. *ibid.*, pp. 31-32.

2) 堀註
堀補入

3) *ibid.*, pp. 32-33.

4)

對する——を支出することが農業の進歩及び國富の増進を促す原動力となることを認め、從つて(ハ)社會を發展形態に於て觀察したる點に、ケネーなどの主張とは趣を異にするものがある。かくてスペンスの議論の必然的結果として、(一)地主は吝嗇なるべからず奢侈に耽るを可とするとの主張、及び(二)總ての租税は結局に於て土地の純生産物(the neat produce of the soil)⁵⁾から支拂はれるのであるから、課税方法の如何を問はず——スペンスは佛蘭西重農主義者の如く土地單税論を主張しなかつた⁶⁾——最後は土地所有者の負擔する所となるとの議論が生れた。

さてここで吾々は、スペンスが不生産的階級の一つに數へた商人の従事する商業は、國富の創造に關して如何なる役割を演ずるか、といふことについての彼れの意見を觀なければならぬ。彼は、彼れの著書に賛成したるコベットの如く、商業(外國貿易の意)を撲滅せよとはいはなかつた。

ただ『英國の富、偉大、及び繁榮は主として商業より獲られたものである』⁵⁾との俗説に反對し、英國は假ひ商業を全然失ふも立派にやつて行けるといふことを論證しようとしたのである。彼は商業を輸入貿易と輸出貿易とに分けて、これ等のものと國富との關係を論じて曰く、

『私は、第一に、如何なる富も、國富の増加も、輸入貿易からは何うしても得られないこと、及び次に、或る場合には輸出貿易から國富が得られる可能性があるけれども、併し英國は特殊事情の結果としてこの部門の商業より國富の幾分かを得たことはないし又現在得てゐないといふことを證明しようと思ふ。⁹⁾』

5) Cf. *ibid.*, pp. 35-40.
6) *Ibid.*, p. 41.
7) Cf. *ibid.*, pp. 41-42.
8) *Ibid.*, p. 44.
9) *Ibid.*

而して輸入貿易が國富を少しも増加しない理由は、スペインによれば至極簡單である。即ち、輸入品に對しては必ず貨幣又は他の財貨の形で正當なる價值が支拂はれるから、といふのである。尤も一部の人々は、輸入商人の利潤や運賃や輸入税が加はつて輸入品の價值が増加する場合には、その増加分だけ國富が附加されるのである、と主張するかも知れないが、これに對してスペンスは、これは輸入品の消費者より、商人、船會社、又は政府の手へ富が移轉することを意味するのみであつて、決して富の創造を證明しない、と駁して居る。¹⁰⁾

次は輸出貿易であるが、これは或る場合には國富の増加を齎らすことがある、とスペンスはいふ。即ち、一國民が輸出する製造品が外國市場に於て得る價值は、『それを製造するに當つて消費された食物の價值と、親方製造業者及び輸出商人の利潤とに、分解される』を常とし、『これ等の利潤は疑もなく國民的利潤である』¹¹⁾が、若しこの利潤が必要にして永保ちのする品物の形で國內に流入するならば、それは確かに國富の一部となるといひ得られる。然るに、若しそれが、英國に於けるが如く、茶とか酒とかいふ『一瞬間だけ富の名に値する』にすぎざる贅澤品の形で流入するならば、『吾々の國富はかかる貿易によつて如何にして増加されたといひ得やうぞ?』¹²⁾ スペンスは以上の如く論じたる後に、更に數個の商業辯護論を擧げて一々これに反駁を加へ、¹³⁾之を結んで曰く、

10) Cf. *ibid.*, pp. 45-46.

11) *Ibid.*, p. 48.

12) *Ibid.*, p. 60.

13) Cf. *ibid.*, pp. 64-75.

『かくて如何なる觀點より商業を眺むるも、英國が全く商業に依存せざることは明かである。商業は英國の富に六片を貢獻することすらしない。其の影響は（製造業と違つて）¹⁴⁾英國の農業を進歩せしめる上にも必要でない¹⁵⁾』

然らば何故商業に關する謬説が世に行はれて居るかといふに、それは、事物の表面のみを眺めて意見を定めるといふ、人間共通の自然的傾向に起因するのである、と彼は斷定して居る。¹⁶⁾

かくて最後に、彼は商業の價值を正しく理解することより生ずる實際的利益——（一）ナポレオンの大陸封鎖（the Continental system）は恐るるに足らざることを、（二）歐洲諸國及び亞米利加が英國に對して有する猜疑心を晴らし、將來の帝國主義的戰爭を避け得ること、從つて（三）英國の植民地に關する現在及び將來の總ての憂ひ煩ひを一掃し得ることを、わが英國民に教へるといふ利益——¹⁷⁾を述べて、全篇を結了して居る。

以上は『商業に依存せざる英國』に於けるスペンスの主張の要領であるが、彼がこの書物に對してミルなどによつて加へられたる批判に答へるために書いた小冊子『農業富源論』——其の中でスペンスは、自説に對するミルなどの誤解を指摘したる後¹⁸⁾に、大體ミルの『商業辯護論』の章別に從つて、一々論駁の筆を採つて居る——の論旨は、既に略説したるものと同一であるから、此處には之を紹介しない。又ミルのスペンス批判の内容の説明も、之を後日に譲る。

14) 堀補入

15) *Ibid.*, p. 75.

16) *Ibid.*

17) Cf. *ibid.*, pp. 79-96.

18) Cf. Agriculture, the Source of the Britain, 1808 pp. 5-17.

結　　言

私は『國富の重要原理』の著者とキリヤム・スペンスとの重農主義的學說を簡單ながら紹介した。これ等兩人の學說は共に『佛蘭西經濟學者』の所說の影響を受け、農業を國富の源なりとする根本思想に支配されて居る。併し細かい點について考へるならば、彼等の主張相互の間にはかなりの差異があり、又彼等の所說と佛蘭西重農主義者の所說との間にも相違がある。例へば、製造業又は製造業者階級の重要さを認むる程度及びこれに對する政策の樹て方、或は土地單稅論に對する態度などに於て、彼等の主張は同一でない。又例へば、土地所有者階級の取扱方、或は階級の分け方などについて、『國富の重要原理』の著者は佛蘭西重農主義者に異論を唱へ、而して例へば、製造業と農業との關係、或は富と繁榮との區別などについて、スペンスは佛蘭西重農主義者の所論に異議を挟んで居る。

而してこれ等英佛兩國の重農主義者間の學說上の相違は、要するに、理想案として提出された佛蘭西重農主義を現實に英國に採用せんと試みしことから生じたものであるが、吾々は、英國重農學說が、佛蘭西重農學說とは餘程形の變つたものであつたにも拘らず、英國に於て著しき勢力を有ち得ざりしことに注意しなければならない。勿論、一部の人々のいふやうに、狭い國土を有

するにすぎざる英國に重農主義は始めから盛んになり得やう筈はない、と單純に且つ抽象的に考へるのは、確かに誤つて居る。吾々は歴史上の時代々々を具體的に考へなければならぬ。現にエペンスの著書の如きは、出版後一年を出でざる内に數版を重ねた位であつて、對佛戰爭に惱まされてゐた當時の英國の人々は可なりの程度に重農主義的思想に共鳴したものと推察するに難くないのである。又この重農主義的思想は、第十八世紀後半より第十九世紀にかけて行はれたる英國の最後の土地圍込運動に對して、他の多くの原因と相竝んで、一つの原因となつたものと觀られ得るであらう。併しそれかといつて、英國重農主義者の勢力に餘り重きを置くのは、大なる過誤である。吾々はこのことについて多くを述べる必要はない。蓋し、他の諸國に先んじて英國に於て行はれたる商工業革命の事實、及びそれに伴ふて勃興せる工業資本主義的經濟學の隆盛が、何よりも良く英國重農主義の微力を物語つて居るからである。